

京都府京田辺市

興戸遺跡第19次発掘調査報告書

— 田辺公園拡張整備事業に伴う発掘調査 —

2022

京 田 辺 市

興戸遺跡第 19 次発掘調査報告書

- 田辺公園拡張整備事業に伴う発掘調査 -

京 田 辺 市



1. 溝 41 (奈良時代以前) 検出状況 (北から)

巻頭図版第2



1. 溝 41・42 完掘状況 (南から)



2. 興戸遺跡中心部 (興戸丘陵上空から)

序

京田辺市は、京都・大阪・奈良の中間に位置し、優れた交通利便性と豊かな自然に恵まれたまちです。古くから交通の要衝として発展し、国指定史跡大住車塚古墳や、一休禅師が晩年を過ごした寺として知られる酬恩庵一休寺など、多彩な文化財が所在しています。

このたび、本市が実施する田辺公園拡張整備事業に伴い、興戸遺跡の発掘調査を実施しました。調査により、奈良時代の古山陰道・山陽道を踏襲すると考えられている府道22号八幡木津線に平行及び直交する溝が検出され、古代の交通や条里に関わる貴重な成果を得ることができました。本書は、その成果をまとめたものです。

発掘調査及び報告書の刊行にあたっては、多くの方々にご指導、ご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

今後とも、文化財の保護と普及にご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和4年9月

京田辺市長 上村 崇

例 言

- 1 本書は令和3年度に京田辺市が実施した、京田辺市興戸小モ詰における田辺公園拡張整備事業に伴う興戸遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は、社会資本整備総合交付金を受け実施した。
- 3 現地調査は令和3年12月3日に開始し、令和4年2月21日に終了した。
- 4 本書の調査体制は以下のとおりである。

調査主体	京田辺市
調査責任者	京田辺市長 上村 崇
調査指導	京都府教育委員会・京田辺市文化財保護審議会
調査担当者	京田辺市市民部文化・スポーツ振興課 吉兼 千陽 同 上野 あさひ
発掘技術員	やましろ文化財株式会社 石山 淳
発掘作業委託	やましろ文化財株式会社

- 5 本書に掲載した地図は、特に表記のない限り京田辺市基本地形図である。周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は、京都府・市町村共同ポータルサイト (<http://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp/g-kyoto/top/index.asp>) に掲載する文化財 GIS データを基に作成した。国土座標・方位のないものは、上位が北である。
- 6 本書で使用している座標は世界測地系・平面直角座標系VIである。方位記号は、座標北を表す。
- 7 今回の調査で出土した遺物と作成した記録類は、報告書の刊行後、京田辺市で保管する。
- 8 航空写真を含む遺構写真は、官公庁許可のもと石山が撮影した。出土遺物写真は、横山亮（オフイスメガネ）が撮影した。
- 9 本書の執筆は、1・3を吉兼が、付章を株式会社パレオ・ラボが、それ以外を石山が行った。本書の編集は吉兼の指導のもと石山が行った。
- 10 発掘調査及び報告書の作成にあたり、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得た。記してお礼申し上げます（敬称略）。

井戸竜太、伊野近富、小池智美、小森俊寛、辻康男、持田達（五十音順）

京都府教育庁指導部文化財保護課、社会福祉法人京都聴覚言語障害者福祉協会山城就労支援事業所「さんさん山城」

目次

1. はじめに	1
2. 調査経過	2
3. 位置と環境	5
4. 既往の調査	8
5. 基本層序	11
6. 遺構	14
7. 遺物	18
8. まとめ	20
付章 放射性炭素年代測定	25

挿図目次

第1図	京田辺市の位置	1
第2図	調査地位置図	2
第3図	地区割図	3
第4図	既往調査との地割検証	3
第5図	ドローンによる航空写真撮影	3
第6図	周辺遺跡の分布図	6
第7図	周辺の調査地	9
第8図	調査区北壁・東壁断面図	12
第9図	基本層序・土色一覧	13
第10図	奈良時代以前の遺構面 全体図	14
第11図	溝41・42断面図	15
第12図	奈良時代～江戸時代の遺構面 全体図	16
第13図	井戸38平面・断面図	17
第14図	出土遺物	19
第15図	溝41延長図	21
第16図	国土地理院航空写真(1948年)の異方位地割範囲	22
第17図	杭材(試料№1)	25
第18図	測定試料(PLD-46476)の採取位置	25
第19図	暦年校正結果	26

表目次

表1	興戸遺跡調査地一覧表	10
表2	測定試料および処理	25
表3	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	26

巻頭図版目次

巻頭図版第1	1. 溝41(奈良時代以前)検出状況
巻頭図版第2	1. 溝41・42完掘状況 2. 興戸遺跡中心部

図版目次

図版第1	1. 溝41・42完掘状況
図版第2	1. 溝41・42、流路01完掘状況 2. 溝41・42、流路01完掘状況
図版第3	1. 溝41・42完掘状況 2. 流路01完掘状況
図版第4	1. 奈良時代～江戸時代の遺構面検出状況 2. 奈良時代～江戸時代の遺構面完掘状況
図版第5	1. 奈良時代～江戸時代の遺構面完掘状況 2. 奈良時代～江戸時代の遺構面完掘状況 北東角部
図版第6	1. 溝05・06・27完掘状況 2. 近世末以降の耕作溝群完掘状況
図版第7	1. 井戸38検出状況 2. 井戸38集石半截状況 3. 溝05須恵器出土状況
図版第8	1. 落込み40縄文土器出土状況 2. 落込み40攪乱断面 3. 落込み40縄文土器出土状況
図版第9	1. 出土遺物

1. はじめに

興戸遺跡は、京田辺市興戸に位置する、縄文時代から中世にかかる複合遺跡である。周辺には京田辺市役所や田辺警察署、京田辺市立田辺中学校などが所在しており、市の中心部であることから開発行為も多く、本発掘調査がこれまで18次にわたり行われている。遺跡内には興戸廃寺も重なって位置するが、廃寺に関わる遺構が検出された例はなく、瓦の採集にとどまる。

平成28年度より、本市では、京都府立農事試験場（後の府立山城園芸研究所、現在は廃止）の跡地において田辺公園拡張整備事業に着手した。これを受けて、令和元年度には、本市教育委員会が施工予定地の一部で試掘調査を実施した。その結果、奈良時代から平安時代にかかる遺構面の存在が確認されている。

令和4年度にまず調整池を造成することが決定されたが、隣接地で遺構面が検出されており、当該地でも遺構面の存在がほぼ確実であることから、このたび、調整池予定地を対象として発掘調査を行った。調査は令和3年12月3日から翌4年2月21日まで実施し、以後の整理作業はやましろ文化財株式会社にて実施した。本報告はその成果をまとめたものである。なお、調査に係る費用は社会資本整備総合交付金を受け、京田辺市が負担した。

本書は、本市職員及びやましろ文化財株式会社が発行し、本市職員の指導のもと、やましろ文化財株式会社が編集した。現地調査及び整理作業にご協力いただいた機関、学識経験者の方々には心から感謝を申し上げる。



第1図 京田辺市の位置

2. 調査経過

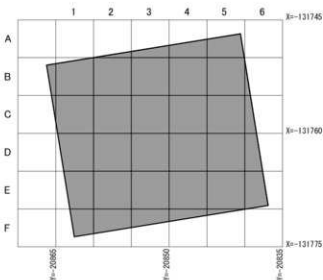
本調査は、京田辺市による田辺公園拡張整備事業（担当課：建設部公園緑地課）に伴うもので、公園地下に埋設する雨水貯留施設の設置工事に先駆けて実施した。公園敷地は府道22号八幡木津線に面して田辺中学校グラウンドの手前まで西に広がり、さらに南へと広がる。調査区は当該府道に面する位置に東西26m、南北23mの約600㎡となる。掘削土の仮置きスペースは調査区西側のみとなり、重機掘削による表土及び下層土は軟弱地盤のため当該重機でのみ移動し、人力掘削土移



第2図 調査地位置図（1：5,000）

動はベルトコンベアを使用した。調査区内はシルトと砂の堆積が主であり、湧水も多いことから壁面は安全勾配にて掘削し、崩落の危険性がある箇所には施工管理技士による土止め支保工を設けた。なお、後の雨水貯留施設設置工事が調査後間もなく開始されるため、本調査契約に埋め戻しは含まれない。

記録写真はフルサイズ一眼デジタルカメラを使用した。産業用無人航空機（ドローン）による航空写真についてもカメラは同仕様である。



第3図 地区割図 (1/500)

基準点は京田辺市公園緑地課提供の4級基準点1点とGNSS測量(VRS)三次元網平均計算にて3級基準点1点を設置し、使用した。

平・断面の実測・図化は、三次元画像解析(SFM/MVS)により生成されるオルソ画像及び三次元点群データを基に作図した。解析画像の取得方法は断面が記録写真用カメラ、平面は無人航空機カメラより撮影し、画像を取得した。ポイント座標の取得は光波測量機による。

遺物の取上方法は、調査区の西から東へ1～6の数字を、北から南へA～Fのアルファベットを付し5m毎の地区割で取り上げた。

地割に関する既往調査との位置関係は各調査年次の図面を世界測地系(JGD2011)座標に変換しCAD上に展開し確認した。また国土地理院による基盤地図情報(.shpファイル)・オルソ画像・過去年次別航空写真も一部CADに取り込み検証した。

以下、現地調査経過の概略を記す。



第4図 既往調査との地割検証



第5図 ドローンによる航空写真撮影

令和3年(2021年)

- 12月3日 調査地の除草作業。仮設トイレ・テント等の搬入。
- 12月6日 除草作業。隣接する京都府田辺警察署へ調査期間中の無人航空機飛行について告知挨拶に伺う。
- 12月8日 重機・仮設ハウス・資材等搬入。調査区範囲設定後、重機による表土掘削を北東角より東辺に沿いに開始。掘削開始直後、壁面からの多量の湧水により壁一部陥落。当該箇所は府道に間近のため急ぎ土止め施工・排水を実施。排水後、土器片を含む遺構を検出。
- 12月9日 調査区北東角より北辺沿いに重機表土掘削及び掘削上移動。複数設置されていた塩ビ管より多量の湧水が流出。作業員による壁面整形、包含掘削及び遺構検出を開始。褐色整地層に遺構を検出。
- 12月10日 重機表土掘削。溝跡・杭列・自然流路01を検出。市公園緑地課の現地視察。
- 12月11日 重機掘削上移動。
- 12月13日 調査区南東角より南辺沿いに重機表土掘削及び掘削上移動。調査区南西角にて下層確認を実施し、地表下約1.7mに黒灰色で硬くしる平坦な砂層検出。南東角についても下層確認を実施し、同層を検出。整地層の可能性もあり下層確認調査も視野に入れる。
- 12月14日 調査区北・東・南辺の壁面整形後、中央部を重機表土掘削及び掘削上移動。前日の下層確認用トレンチ壁が湧水によりオーバーハング状に崩落、危険と判断し当該トレンチを埋め戻す。
- 12月15・16日 調査区中央部より西への重機表土掘削では、旧京都府農業研究所の研究棟の位置にあたり、コンクリートガラ・塩ビ管・土壌改良剤等、攪乱範囲が広がる。
- 12月17日 昨夜からの雨により調査区は冠水し、排水作業に平日を費やす。GNSSによる基準点を設置。
- 12月20日 調査区西部を重機表土掘削及び掘削上移動。
- 12月21日 上層重機表土掘削終了。調査区西部で数条の切り合う溝跡を検出。
- 12月22日 ベルトコンベアによる人力掘削土仮置きスペースを設けるため、重機により掘削土をさらに西へ移動。
- 12月23日 無人航空機による上層検出航空写真撮影及び検出オゾン図作成用撮影。重機搬出。
- 12月24日 検出遺構ライン引き。年末年始休暇に向けて調査区養生及び仮設物整理。本年の現地調査終了。
- 12月27・28日 内業にて遺構検出オゾン図作成及び遺構番号付与。

令和4年(2022年)

- 1月5日 現地調査再開。排水作業に平日を費やす。ベルトコンベア及び発電機搬入。
- 1月6日 流路01の深度確認のためセクションを設置し約1m掘削するも湧水が増し、底は未確認。流路01の人力完掘は不可能と判断し、0.5m程度の掘削とする。流路01底部確認は下層重機掘削時とする。
- 1月7日 調査区北東部より遺構掘削開始。各遺構埋土より土器片出土。
- 1月12日 興戸跡調査の有識者である伊野近富氏より本調査への指示を受ける。調査区西部の遺構掘削開始。耕作溝より集石遺構検出。
- 1月13・14日 遺構断面記録及び完了作業。全景写真撮影に向けた清掃作業。
- 1月15日 無人航空機による上層完掘航空写真撮影及び遺構図作成用撮影。三次元解析用座標点測量。下層掘削のため重機搬入。
- 1月17・18日 重機下層掘削を調査区南西角より南辺沿いに開始。小ピット複数検出。流路01内より縄文時代晩期とみられる土器片出土。流路01底は下層面上よりさらに下がる。
- 1月19日 重機下層掘削を調査区南東角より東辺沿いに掘削。流路01を北に跨ぐ位置より土質が変化し、上層・下層間に府道に沿う溝41検出。
- 1月20日 重機下層掘削を調査区北東角より北辺沿いに掘削。溝41より西側は上層面下から続くベース沖積層のため、下層まで掘削。
- 1月21・24日 調査区中央部より西への重機下層掘削及び掘削上移動。
- 1月25日 伊野近富氏に検出溝41を実際にご覧いただき指示を受ける。溝41の検出写真撮影。
- 1月26日 溝41にセクション設定し掘削開始。溝41内北端に本杭を検出。遺物なし。
- 1月27・28日 当初溝41の東側に土坑認識していた遺構が、断面観察から当該遺構は溝41から東へ下りながら分流する溝42と判明。溝41・42共に遺物は全く検出されず。
- 1月31日～2月2日 下層検出写真撮影に向けて壁面及びベルトコンベア用スロープ整形、掃除作業。
- 2月3日 無人航空機による下層検出航空写真撮影及び検出オゾン図作成用撮影。
- 2月4日 流路01下層を掘削開始。下層面上に植生根跡小ピットが全面に広がる。遺物及び水田に伴う畦畔等の遺構なし。
- 2月5・6日 内業にて下層検出オゾン図及び溝41・42の断面図作成及び遺構検証。
- 2月7日 下層面上に遺構の可能性のある部分を薄く削平するも自然地形の凹凸であると確認。
- 2月8日 伊野近富氏に溝41・42を実際にご覧いただき指示を受ける。
- 2月9日 流路01底部周辺より弥生時代の櫛歯文の土器片他複数出土。
- 2月10・14日 流路01及び溝41・42のセクション掘削。
- 2月15・16日 流路01完掘。最終全景写真撮影に向けて清掃作業。
- 2月17日 無人航空機による下層完掘航空写真撮影及び遺構図作成用撮影。三次元解析用座標点測量。
- 2月18日 断削りによる溝41・42及び下層断面確認。ベルトコンベア及び発電機搬出。
- 2月21日 仮設ハウス・トイレ及び資材搬出。市公園緑地課の要望により調査区をシート養生し現地調査終了。
- 3月29日 市公園緑地課了承の後、現地にて柳バレオ・ラボト康男氏・柳アルクス持田透氏に溝41・42を実際にご覧いただき指示を受ける。

3. 位置と環境

(1) 地理的環境

京田辺市は、京都府南部の南山城地域の北西部、木津川左岸に位置する。北は八幡市、南は精華町、木津川を挟んで東は城陽市及び井手町、西は生駒山系に連なる田辺丘陵を挟んで大阪府枚方市及び奈良県生駒市と境界を接している。市の東部には木津川が流れ、木津川によって形成された沖積平野が広がり、西部には田辺丘陵とそこから流れ出る木津川支流によって形成された扇状地が広がる。支流としては手原川、馬坂川、防賀川などが挙げられるが、これらの河川はいずれも天井川となり、河川の下を道路や線路が通るといふ、木津川岸に特徴的な景観を生み出している。

興戸遺跡は、京田辺市中心部の平地に位置し、丘陵部の東端に接している。遺跡の範囲は、南北1.5km、東西0.8kmにわたる。

(2) 歴史的環境

縄文時代以前の遺跡は少ないが、旧石器時代の遺跡としては、市内南部の山間部に所在する高ヶ峯遺跡が知られており、サヌカイト製石核が採集されている。縄文時代の遺跡としては、後期の集落遺跡である薪遺跡(37)が近在し、柱穴や土坑などが検出されている。また、市内南部の三山木遺跡(62)からは、晩期の土器が出土している。三山木遺跡に近接する山崎遺跡(64)からは、石棒や異形石製品が出土している。

弥生時代前期の遺跡としては、土坑などが見つかった宮ノ下遺跡(66)が挙げられる。三山木遺跡では前期の遺物包含層が検出され、石器や碧玉製管玉の生産が行われていたことが確認されている。中期では、興戸遺跡の西側の丘陵上に位置する中世の田辺城跡(15)の下層から、堅穴建物や方形周溝墓が見つかったほか、南垣内遺跡(26)でも方形周溝墓が検出されている。後期では、集落遺跡として飯岡遺跡(52)や田辺天神山遺跡(76)が挙げられる。中期の田辺城跡下層を含めて、これらの集落は高地性集落であると考えられる。また、興戸遺跡西側の丘陵上には、方形台状墓(興戸5号墳)(7)が築かれている。

古墳時代前期の遺跡としては、興戸遺跡西側の丘陵上に興戸古墳群(4～11)がある。なかでも1号墳(前方後円墳、全長24m)と2号墳(円墳、直径28m)は首長墓として位置づけられている。2号墳は小規模な円墳だが、内行花紋鏡や、管玉・鍬形石・車輪石・石銅などの石製品、鉄剣など、豊富な副葬品が出土したことで知られる。また、北西の丘陵上に築かれた天理山古墳群(32)は、令和3年度に実施した調査により、前方後円墳2基、前方後方墳1基からなる前期の古墳群であることが明らかになっている。南東の飯岡丘陵には、市内最大の前方後円墳である飯岡車塚古墳(全長87m)(53)が位置している。古墳時代中期には、飯岡丘陵にゴロゴロ山古墳(円墳、直径60m)、薬師山古墳(円墳、直径38m)、トツカ古墳(円墳、直径25m)が築造され、同一の丘陵に継続して古墳が造られている。古墳時代後期の遺跡としては、興戸遺跡の北西に位置し、10基の円墳と10基の横穴墓で構成される堀切古墳群(44)が代表的である。



- | | | | | | |
|-------------|------------|-------------|--------------|--------------|-------------|
| 1. 興戸遺跡 | 2. 興戸廃寺 | 3. 郡塚古墳 | 4. 興戸1号墳 | 5. 興戸2号墳 | 6. 興戸4号墳 |
| 7. 興戸5号墳 | 8. 興戸6号墳 | 9. 興戸7号墳 | 10. 興戸8号墳 | 11. 興戸9号墳 | 12. 興戸丘陵東遺跡 |
| 13. 田辺遺跡 | 14. 竹ノ脇遺跡 | 15. 田辺城跡 | 16. 田辺奥ノ城1号墳 | 17. 田辺奥ノ城2号墳 | 18. 興戸丘陵西遺跡 |
| 19. 興戸宮ノ前遺跡 | 20. 興戸城跡 | 21. 川原谷遺跡 | 22. 興戸宮ノ南遺跡 | 23. 酒壺古墳 | 24. 大切遺跡 |
| 25. 鍵田遺跡 | 26. 南垣内遺跡 | 27. 草路城跡 | 28. 宮ノ後遺跡 | 29. 河原遺跡 | 30. 尼ヶ池遺跡 |
| 31. 小欠古墳群 | 32. 天理山古墳群 | 33. 稲藁遺跡 | 34. 伝道林遺跡 | 35. 東神屋遺跡 | 36. 醍醐孫神社遺跡 |
| 37. 薪遺跡 | 38. 薪高木古墳群 | 39. 薪狭道1号墳 | 40. 西山1号墳 | 41. 西山3号墳 | 42. 牛ノ宮古墳 |
| 43. 観音山古墳 | 44. 堀切古墳群 | 45. 西薪遺跡 | 46. 薪城跡 | 47. 畑山遺跡 | 48. 狼谷遺跡 |
| 49. 茂ヶ谷遺跡 | 50. 橋折遺跡 | 51. 大將軍遺跡 | 52. 飯岡遺跡 | 53. 飯岡車塚古墳 | 54. 古屋敷遺跡 |
| 55. 遠藤遺跡 | 56. 野神遺跡 | 57. 田中東遺跡 | 58. 東角田遺跡 | 59. 田中西遺跡 | 60. 二又遺跡 |
| 61. 上谷浦遺跡 | 62. 三山水道跡 | 63. 直田遺跡 | 64. 山崎遺跡 | 65. 山崎古墳群 | 66. 宮ノ下遺跡 |
| 67. 南山城跡 | 68. 南山道跡 | 69. 木原城館跡 | 70. 西羅遺跡 | 71. 芝山遺跡 | 72. 口胸ヶ谷遺跡 |
| 73. 口胸ヶ谷古墳 | 74. 多々羅遺跡 | 75. 七瀬川遺跡 | 76. 田辺天神山遺跡 | 77. 都谷北遺跡 | 78. 都谷遺跡 |
| 79. 新宗谷館跡 | 80. 新宗谷館跡 | 81. 新宮前館跡 | 82. 新宮前遺跡 | 83. 新宮社東遺跡 | 84. 下司古墳群 |
| 85. マムシ谷遺跡 | 86. 下司館跡 | 87. 大御堂裏山古墳 | 88. 観音寺東館跡 | 89. 観音寺東遺跡 | 90. 普賢寺跡 |

第6図 周辺遺跡の分布図 (1 : 25,000)

飛鳥時代の遺跡としては、普賢寺（現在の大御堂観音寺）が7世紀末頃に創建されたと考えられている。普賢寺跡（90）では、飛鳥時代後期から中世にかけての瓦が採集されている。また、創建年代は不明だが、興戸遺跡内に位置する興戸廃寺（2）でも、飛鳥時代後期から平安時代の瓦が採集されている。寺院のほかにも、普賢寺の付近には、飛鳥時代末の須恵器窯である新宗谷窯跡（79）が位置する。

奈良時代には、平城京から全国へ伸びる官道が整備され、京田辺市域には山陰・山陽道が設置された。現在の府道22号八幡木津線がこれをほぼ踏襲すると考えられており、興戸遺跡内も通過している。興戸遺跡内では、この古山陰・山陽道に沿って西へ約30°振れる溝や掘立柱建物が検出されている。遺物では、井戸から墨書土器や土馬などが、包含層からは二彩陶器も出土しており、官衙的性格がうかがえる。

興戸遺跡は平安時代の遺跡としても顕著な調査成果があり、掘立柱建物や井戸などが検出され、緑軸陶器や灰軸陶器が多く出土している。平安時代の遺跡としては、ほかに市南部の三山木遺跡でも掘立柱建物や井戸が見つかった。三山木遺跡付近には奈良時代に古山陰・山陽道の山本駅が置かれたと考えられており、これらの遺構はその機能を引き継いだ施設のものである可能性が考えられる。

中世の遺跡としては、薪遺跡で在地領主の居館跡や園池の遺構が検出されている。遺物は13世紀後半から14世紀前半を中心とし、多量の土師器皿とともに白磁四耳壺、青磁盤等の優品が出土している。中世後半から近世にかけては、付近に田辺城や興戸城が築かれ、田辺城跡では15世紀から16世紀にかけての堀切や石組遺構が検出されている。また、普賢寺川沿いには草路城（27）、南山城（67）、都谷館（78）、新宗谷館（80）など複数の城館が築かれた。

4. 既往の調査

興戸遺跡では過去18回の調査が実施されている。その概略を年次調査一覧として表1に示し、以下では、時代別にまとめて提示する。

縄文時代での遺構は未検出であるが、縄文時代晩期の深鉢片（6次）をはじめとする縄文土器片（16次）・サヌカイト製石鏃（13次）が出土し、当時からの人跡が認められる。

弥生時代では中期の土壌墓（6次）が検出されている。土器については多くの年次調査で出土しており、弥生時代中期のものが目立つ。西側丘陵上の興戸古墳群とともに知られる興戸丘陵東遺跡及び興戸遺跡南方の田辺天神山遺跡の弥生時代後期高地性集落の存在も踏まえ、丘陵上下部での時期の隔たりに関心が持たれる。

古墳時代では、興戸塚ノ本（18次）で5世紀後半に築造された一辺約30mの方墳が検出され、多数の埴輪片も出土している。西側丘陵上を主として展開される古墳時代前期を中心とした興戸古墳群とは様相が異なり、扇状地扇端部に程近い低地で古墳時代中期後半の古墳が存在していたことは、今後の興戸遺跡を考察するうえで新たな展開である。そのほか古墳時代の遺構としては、竪穴建物（2・9次）・貯蔵土坑（4次）・溝が検出され、土器については布留式の小型丸底壺・高坏等が多くの年次調査で出土している。自然流路（17次）の肩部付近より完形に近い状態で1～2m間にまとまって出土している例もあり、当時の水辺における祭祀（7・17次）の痕跡とも考えられる。

飛鳥時代では、当時の遺物を多く含む道路側溝及び道路敷（14次）が古山除・山陽道併用道路¹⁾に想定されている府道22号八幡木津線に直交する角度で検出されており、时期的に併用道路となる以前の古山除道の存在を認識させる。奈良時代以前の水田遺構（11・17次）も確認されている。

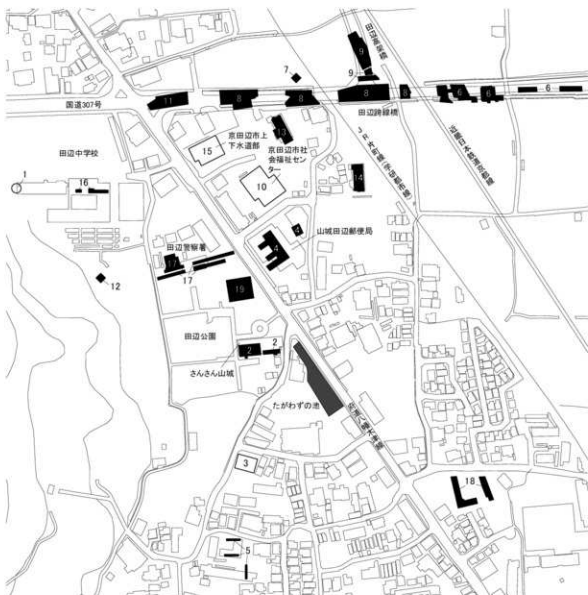
奈良時代では府道22号線に沿う溝（N33°W）及びそれに直交する溝（N57°E）が各年次（2・6・8・9・13・14・17・18次）調査で検出されており、これらの成果から興戸地域における古山除・山陽併用道路を軸とした条里型の異方位方格地割²⁾の存在が明らかにされた。当該地割に伴う溝として最長のものは、8次・9次調査地間で75m以上が確認されている。また、18次調査ではN57°Eの奈良時代のものみられる溝が検出されており、8次調査のN57°Eの溝（SD 8183）からは府道22号線の軸に沿って南に約408mの距離に位置する。興戸地域内における南北間方格地割はこれ以上の距離に及ぶと推測できる。そのほか、奈良時代の主要遺構として、興戸小モ詰（2次）西側丘陵裾の台地状上部縁にて正南北方位の規格性をもった掘立柱建物群が検出され、官衙的建物群³⁾の可能性が示唆されている。

また奈良時代から平安時代にかけての円面硯（6・8次）・二彩陶器（9次）・製塩土器（8・9・13・17次）・土馬（8・13次）が、遺構に伴うものとしては、銭貨・ガラス小玉の埋納遺構（8次）、井戸内からはほぼ完形の墨書土師皿「東」「養」・斎申・銭貨（8次）、ほぼ完形の墨書須恵器杯「薬」（13次）など、祭祀に関わる遺物・遺構も検出されている。

平安時代では、前期にかけての掘立柱建物がN 8～39°Wを軸とした範囲で多く検出され、興戸

遺跡の盛期とみる。そのほか特徴的な遺構として、縦板組横棧留型井戸（10次）が検出され、底部に直径約1m・高さ0.35mの丸太刺抜き水溜が設けられた稀な造りとなっている。遺物については殆どの年次調査で緑釉陶器・灰釉陶器が出土しており、10次調査では平安時代前期を中心とした遺物のなかで緑釉陶器・灰釉陶器の割合が2%を占め、当時の官衙や寺院の存在が示唆されている。

鎌倉時代では主要遺構は確認されていないが、多くの年次調査で平安時代後期から鎌倉時代にかけての中国製の白磁・青磁、瓦器等が出土している。12次調査においては、鉄塔基礎の一部範囲という狭小な調査であったが、鎌倉時代の包含層・遺構が確認され、既存鉄塔の基礎埋土からは11世紀後半の双鳥紋瑞花五花鏡と白磁碗が出土しており、当時の有力者の館等の遺構の存在が丘陵裾部に推定される。一方府道22号線より東側については、平安時代後期以降に耕地化（10次）が進むとみられる。



第7図 周辺の調査地（1：4,000）

国土地理院基盤地図情報データ（shp）より 数字は奥戸遺跡調査回数（背景色が白の調査地は未報告）

表1 興戸遺跡調査地一覧表

年次	所在地	検出遺構	出土遺物
第1次 1974年	興戸北鉢立21 (田辺中学校)	擾乱による消失。	古墳時代の須恵器・陶輪片・石製玉類・土師器。
第2次 1979年	興戸小毛跡18-1 (旧・山城園芸研究所)	古墳時代後期の竪穴建物・溝。奈良時代～平安時代の竪立建物【正南北方位の規格性、官衙的建物群の可能性】・溝。	弥生時代中期中葉～中期後葉の土器。古墳時代の須恵器・土師器。奈良時代～平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器。
第4次 1987年	興戸大伏5-3 (山城田辺郵便局)	古墳時代前期の貯蔵土坑。奈良時代の竪立建物。	弥生時代の石包丁。古墳時代の土師器(小型丸底蓋・高杯等)。
第5次 1987年	興戸郡塚37	古墳時代の溝・土坑。平安時代の溝	弥生時代中期～後期の土器。古墳時代の須恵器・土師器。平安時代後期～鎌倉時代の土師器・瓦器・黒色土器・無釉陶器・中国製白磁。
第6次 1989年	興戸大伏・興戸宮ヶ辻 地区(国道307号)	弥生時代中期の土壇墓。弥生時代後期～古墳時代前期の溝。奈良時代～平安時代の竪穴建物・竪立建物・溝・溝(N33°W)。平安時代後期～鎌倉時代の竪立建物。中世耕作法(N24°W)。	縄文時代晩期の土器(深鉢片)。弥生時代中期の煮炊。弥生時代の土器。古墳時代の須恵器・土師器。奈良時代～平安時代の須恵器(円面硯・瓢子他)・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器。平安時代後期～鎌倉時代の土師器・瓦器・中国製白磁・青磁。中世の瓦・焼締陶器。近世の青花磁器。
第7次 1990年	興戸大伏地区 (鉄塔)	遺構は検出されず。【興戸集落建物群の北端付近小】	弥生時代の土器(IV様式)。庄内式土器(甕)。古墳時代の須恵器・土師器(小型丸底蓋・小型鉢・高杯)。奈良時代の須恵器(甕蓋等)。平安時代の灰釉陶器。
第8次 1990年	興戸大伏地区 (国道307号)	奈良時代から平安時代の竪立建物・土坑・井戸(井筒有)・溝(N33°W)【直交N57°E・N39°W】【府道八幡・木津線(古山線・山陽道併用道路/足利線)に合う方格地割が確認される】。中世耕作法(N24°W直交N66°E)。	弥生時代の土器。古墳時代の須恵器・土師器(小型丸底蓋・高杯等)。奈良時代～平安時代の須恵器(円面硯他)・土師器(黒書「東」「美」並他)・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器・製塩土器・瓦・倉庫・銭貨(神功開宝・万年通宝)・ガラス小玉・土器・土師蓋小片。平安時代後期～鎌倉時代の土師器・瓦器・中国製白磁・青磁。
第9次 1991年	興戸八木屋地区 (新田辺駅前線)	古墳時代の竪穴建物・溝・小土坑・埋蔵。奈良時代の竪立建物・溝・瓦葺り・溝(N33°W)【8次調査の溝の延長・総延長は75m以上】・溝。平安時代以降の耕作法(N26°W)。	弥生時代中期の土器。古墳時代の須恵器・土師器(小型丸底蓋・高杯等)。奈良時代～平安時代の須恵器・土師器・二彩陶器・灰釉陶器・緑釉陶器・製塩土器・瓦・鉄釘。
第11次 1991年	興戸大伏地区 (国道307号)	奈良時代以前の水田畦畔(N50°W)。奈良時代の権利(N40°W)。中世ビット。近世耕作法(N5°W)。	弥生時代の土器。奈良時代～平安時代の須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦・土樋。平安時代後期～鎌倉時代の中国製青磁。中世の瓦器。
第12次 1994年	興戸山添地区 (鉄塔208号)	鎌倉時代の包舎層・遺構の存在は確認する。も調査区外のため詳細は不明。	奈良時代～平安時代の須恵器・土師器・灰釉陶器。平安時代後期～鎌倉時代の銅瓶(双耳杖状文五花瓶)・須恵器・土師器・中国製白磁・青磁。
第13次 1996年	興戸大伏23-1 (マンション)	古墳時代の溝。奈良時代の井戸・溝(N33°W)。平安時代の竪立建物(庇有含む)。平安時代以降の溝(N24°W)。中世耕作法(N10～20°W)。	縄文時代の石鏝。古墳時代の須恵器・土師器。飛鳥時代の須恵器・土師器。高杯型ミニチュア土器。奈良時代～平安時代の須恵器(墨書「墨」杯他)・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器・製塩土器・銭貨(乾元大宝)・土馬・瓦・土樋・フイゴ羽口・鉄滓。中世の土師器・瓦器・白磁・青磁。
第14次 1997年	興戸八木屋17-3 (マンション)	古墳時代の小土坑。飛鳥時代～奈良時代の土坑・溝(N33°W)・道路遺構(N57°E)【古山線・山陽道併用道路に直交する道路】。平安時代の竪立建物。平安時代以降の溝(N24°W)。中世～近世耕作法(N5°W)。	弥生時代の石鏝。古墳時代のS字口縁台付甕・須恵器。飛鳥時代の須恵器・土師器。奈良時代～平安時代の須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器・瓦・土樋。平安時代後期～鎌倉時代の土師器・瓦器・中国製白磁・青磁。
第16次 2011年	興戸北鉢立21 (田辺中学校)	平安時代後期～鎌倉時代の溝(N7～8°E)。	縄文時代の土器。平安時代後期～鎌倉時代の土師器・瓦器・中国製白磁・青磁・焼締陶器。
第17次 2011年	興戸小毛跡1 (田辺警察署)	古墳時代の土坑・水路。奈良時代以前の水田遺構。奈良時代～平安時代の柱列【複数。竪立建物群の可能性】・溝(N41°W・N31～33.5°W・N8°W)・権利(N11°W)。平安時代後期～鎌倉時代の溝(N10°E・N22°E)。中世以降の柱穴・耕作法。近世以降の耕作法。	古墳時代の須恵器・土師器(小型丸底蓋・高杯等)。奈良時代～平安時代の須恵器・土師器・灰釉陶器・黒色土器・瓦・製塩土器。平安時代後期～鎌倉時代の土師器・瓦器・中国製白磁・青磁。
第18次 2015年	興戸塚ノ本21-1ほか (宅地造成)	古墳時代中期後半(5世紀後半)の方墳(1辺約30m)に伴う葺石・周溝。奈良時代の溝(N57°E)。近世耕作法。	弥生時代の土器。古墳時代の土師器・円筒埴輪・形象埴輪(家形・蓋形)・權形木製品。平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器。中世の輸入陶磁器。

未報告の調査

- ・第3次(1984年) 興戸若宮41(マンション)/弥生時代の土器片等は出土したものの遺構は検出されず。
- ・第10次(1991年) 興戸大伏5-8(社会福祉センター)/平安時代の縦板横積埋留型の井戸(底部にヒノキを割り抜いた水溜)。鎌倉時代の溝が検出。出土遺物は平安時代前期を中心とした遺物が出土。なかでも灰釉陶器・緑釉陶器の割合が約2%を占める。
- ・第15次(2003年) 興戸大伏18-1(上下水溜り)/古墳時代中期の埋納土坑が検出。

5. 基本層序

調査地の現地地形は、調査区南側が台地状に一段高くなっている（2次調査地。現在は「さんさん山城」が所在）。東側には府道22号八幡木津線が走り、僅かに段をなして低くなる。また府道22号線を東に越えるときさらに地形は東へ下る。調査地表面は標高約36.2mである。基本地形は防賀川扇状地形に沿って緩やかに南西から北東へ傾斜する。

調査区内では扇状地の伏流水によるV層及び南から東に振れる自然流路跡の礫層からの湧水が非常に多く、雨量の少ない冬季調査にも関わらず、排水溝を設けるも毎夜にして遺構面は冠水した。調査地より府道沿い南60mに位置し、神功皇后伝説のある「不違（たがわず）の池」の存在が、古来より豊かな湧水の地であることを物語る。

今回の調査の基本層序はI層からVI層を数える。

I層 旧京都府立山城園芸研究所の研究棟を建設した際及びその改変による造成土である。国土地理院が公開する年次別航空写真から研究棟の変遷が窺え、調査区中央より西側に研究棟が並び、ちょうどその位置より造成層が薄層に細分されたが、断面図には省略した。

II層 褐灰色粘質砂層で研究所建設以前の旧耕作土（近世末以降）である。調査区西側でII層下V層上面に検出されている溝跡（N14' W）は当時の耕作に伴うものである。これについても1961年国土地理院航空写真で耕地配置（N14' W）が窺える。

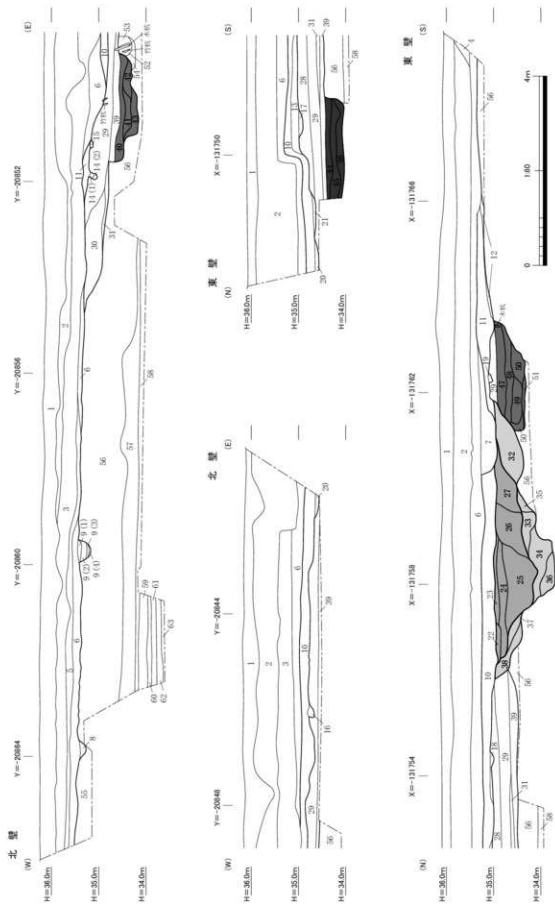
III層 褐灰色粘質砂層で中世以降の耕作土である。古代から中世の遺物が微量ながら包含する層で層厚は10～30cmを測る。

IV層 褐色～灰白色シルト層で硬くしまる。3層に細分でき（層厚は上23cm、中23cm、下10cmを測る）、一部に下層と中層の間に暗灰色の粗砂層がみられる。上層と中層には鉄分・マンガンを含み、扇状地に分布する低地水田土とみられる。下層は灰白色で粘質が強く上層の鉄分の影響を受ける。いずれも自然堆積である。IV層上面で古代遺構と中世杭列を検出した。

V層 灰色と橙色の混じるシルト層で2層に細別するが不定形である。防賀川による扇状地形成過程において比較的短期間に堆積した層とみられる。層厚は調査区南西部で1.2mを測り、調査区北東部で50cmを測る。遺物は含まず防賀川扇状地内でベースとなる沖積層（地山）である。V層上面で奈良時代以前のものと思われる溝41・42を検出した。

VI層 VI層上面は灰色粘質砂層で硬くしまり、ほぼ水平に堆積する層（地山）である。植生根跡とみられる小ビットが数多く分布し、一時期に地表面であったと考える。V層の短期的な堆積作用によって瞬時に埋没し、植生根跡が顕著に残ったとみられ、自然地形と考える。地山としてV層とまとめるか悩んだが、一時期の地表面であるためVI層とした。VI層以下の各層についてもほぼ水平に堆積している。

扇状地形成のベース土であるV層及びその上層であるIII・IV層は緩やかに傾斜しているが、II・III層の耕地造成の際に調査区西側及び南側においてはIII・IV層及びV層の一部までが削平され、III・IV層が残存するのは調査区北東部の一部のみであった。



第 8 図 調査穴北壁・東壁断面図 (1:80)

北巻・東巻（共通）

1	10YR8/3 に近い黄褐色細砂	
2	7.5YR/1 灰黄色粘質細砂 ϕ 5~10cm の塊を含む(粘土)	(現代土)
3	7.5YR/1 灰黄色細砂 土砂 ϕ 0.5~2cm の塊及び管・ビニール片を含む	【 I 層 】
4	NS/ 灰色中砂～粗砂 ϕ 2~3cm の塊多量含む	
5	7.5YR/1 褐色～7.5YR/3 褐色細砂～中砂 ϕ 0.5~3cm の塊含む	(近世末以降の耕作土)
6	10YR5/1 褐色粘質細砂～中砂 土砂 ϕ 0.5~3cm の塊含む	【 II 層 】
7	5Y6/1 灰色細砂～中砂	
8	2.5Y/1 灰黄色粘質細砂～中砂 (近世末以降の耕作層)	(自然掘折積)
9	102.5YR4/4 に近い赤褐色中砂～粗砂 ϕ 0.5~1cm の塊多量含む	
10	10YR7/1 灰白色粘質細砂	
11	10YR7/1 灰白色粘質細砂 ϕ 1~2cm の塊少量含む	(中世以降の耕作土を含む)
12	5Y6/1 灰黄色粘質細砂 土砂 ϕ 0.5~1cm の塊含む	【 III 層 】
13	10YR/1 褐色粘質細砂～中砂 大塊少量含む	
14	(1)10YR6/2 灰褐色細砂～中砂 土砂 ϕ 1~2cm の塊少量含む (2)10YR6/2 灰褐色細砂～中砂 ϕ 1~3cm の塊含む	
15	10YR6/2 灰褐色細砂～中砂 ϕ 1~3cm の塊含む	
16	2.5Y/1 灰黄色細砂～中砂 土砂 ϕ 1~6cm の塊含む	
17	7.5YR/3 褐色粘質細砂～中砂 土砂 ϕ 1~3cm の塊多量含む (標SD22)	
18	10YR7/4 に近い黄褐色中砂 ϕ 1~3cm の塊多量含む	
19	10YR6/2 灰褐色粘質細砂 ϕ 0.5~2cm の塊含む	
20	10YR2/1 黒色粘質中砂 土砂片を含む (SX36)	(準込み)
21	10YR2/1 黒色粘質中砂 土砂片を含む (SX37)	
22	7.5Y/5/1 褐色粘質中砂 ϕ 0.5~2cm の塊多量含む	
23	10YR2/1 灰白色中砂～粗砂 ϕ 0.5~3cm の塊多量含む	(表層NSB01 上層)
24	5Y6/2 灰黄色粘質細砂～中砂	
25	10YR/1 灰白色粘質細砂～中砂	
26	10YR/1 灰白色粘質細砂 土砂 ϕ 1~2cm の塊含む	
27	2.5Y/6/1 灰黄色粘質細砂 土砂 ϕ 0.5~1cm の塊含む	
28	10YR3/4 暗褐色～2.5Y/5/1 黄褐色細砂～中砂 土砂 ϕ 0.5cm 程度の塊及び鉄分を含む (古代表地層)	【 IV 層 】
29	10Y7/1 灰白色粘土～シルト 固くまとる ϕ 1~3cm の塊含む	
30	10YR5/1 褐色粘質細砂～中砂 土砂 ϕ 1~3cm の塊含む	

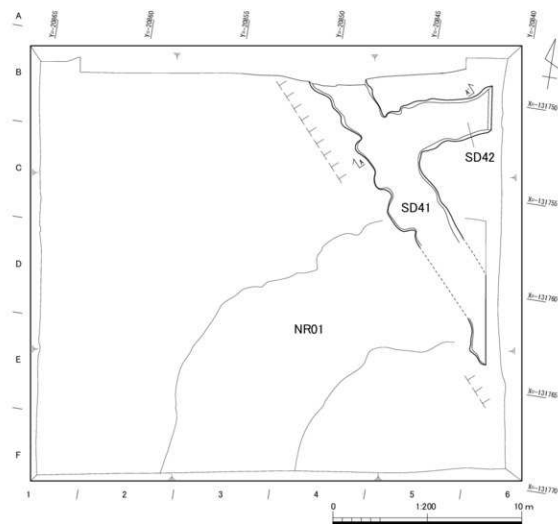
第9図 基本層序・土色一覧

31	2.5Y/5/2 暗灰黄色粘質中砂～粗砂 ϕ 0.5cm 程度の塊含む	
32	10Y7/1 灰白色中砂～中細 土砂 ϕ 1cm 程度の塊含む	(表層NSB01 下層)
33	10Y7/1 灰白色中砂～中細 土砂 ϕ 1cm 程度の塊含む	
34	2.5Y/6/1 灰黄色粘質シルト～細砂 ϕ 0.5cm 程度の塊含む	
35	2.5Y/6/1 灰黄色粘質シルト～細砂 ϕ 3cm 程度の塊少量含む	
36	5YR/8 赤褐色細砂～大塊 土砂 ϕ 1cm 程度の塊含む	
37	5Y6/4 オリーブ～黄色～10YR5/8 黄褐色シルト 土砂 ϕ 1cm 程度の塊含む	
38	NS/ 灰黄色粘質シルト～細砂 土砂 ϕ 0.5~1cm の塊含む 上層の鉄分浸食	
39	10Y7/1 灰白色粘土～シルト 土砂 ϕ 0.5~1cm の塊及び植生跡・有機物含む	(標SD41)
40	10Y6/1 灰黄色粘土～細砂 土砂 ϕ 0.5cm 程度の塊少量及び植生跡・有機物含む	
41	2.5Y/6/1 オリーブ～灰黄色細砂～中砂 土砂 ϕ 0.5cm 程度の塊含む	
42	2.5Y/5/1 オリーブ～灰黄色粘質シルト～植生跡・有機物含む	
43	2.5Y/7/1 暗オリーブ～灰黄色粘質シルト～植生跡・有機物含む	
44	2.5Y/5/1 灰黄色粘土～シルト 土砂 ϕ 0.5~1cm の塊及び植生跡・有機物含む	(標SD42)
45	2.5Y/6/1 オリーブ～灰黄色細砂～中砂 土砂 ϕ 0.5~1cm の塊含む	
46	2.5Y/6/1 オリーブ～灰黄色細砂～中砂 土砂 ϕ 0.5~1cm の塊含む	
47	7.5Y/6/1 緑灰色粘質シルト 植生跡・有機物含む	
48	7.5Y/6/1 緑灰色粘質シルト～細砂 植生跡・有機物含む	
49	10Y6/1 灰黄色粘質シルト～細砂 植生跡・有機物含む	(標SD41)
50	2.5Y/6/1 オリーブ～灰黄色粘質細砂～中砂 植生跡・有機物含む	
51	7.5Y/6/2 灰黄色～中砂	
52	7.5Y/6/1 灰黄色粘土～シルト 有機物含む	
53	2.5Y/6/1 オリーブ～灰黄色粘質シルト 有機物含む	
54	2.5Y/6/1 緑灰色粘質細砂～中砂 ϕ 0.5cm 程度の塊及び有機物含む	【 V 層 】
55	2.5Y/6/2 灰黄色細砂～中砂 ϕ 0.5cm 程度の塊含む (植生跡あり)	
56	10Y6/1 灰黄色～7.5Y/6/8 褐色粘土～シルト ϕ 0.5~1cm の塊含む	
57	5Y6/1 オリーブ～黄色細砂 土砂 ϕ 0.5cm 程度の塊含む (植生跡あり)	
58	NS/ 灰黄色粘質中砂～粗砂 土砂 ϕ 0.5~2cm 程度の塊含む (植生跡あり)	
59	2.5Y/5/1 黄色～2.5Y/6/8 明黄褐色細砂 土砂 ϕ 0.5~1cm の塊含む	
60	2.5Y/4/1 灰黄色粘質細砂～中砂 土砂 ϕ 1~3cm の塊含む	(標山)
61	2.5Y/5/1 オリーブ～灰黄色中砂～粗砂 土砂 ϕ 1~3cm の塊含む	【 VI 層 】
62	10YR2/1 黒褐色粘土～シルト 固くまとる ϕ 1~3cm の塊含む	
63	2.5Y/5/1 オリーブ～灰黄色粘質シルト 固くまとる	

6. 遺構

(1) 概要

今回の調査では、奈良時代から平安時代にかけて形成されたとみられる自然流路が調査区の約25%の面積を占める。調査区中央より西側では、旧京都府立山城園芸研究所の研究棟基礎による攪乱に加え、中世以前のⅢ・Ⅳ層が後世の耕作地化に伴い削平されており、Ⅴ層上の近世末以降の耕作溝に切られる形で奈良時代から平安時代にかけての井戸底部を検出したほかは、近世以降とみられる溝3条、縄文土器を含む落込みの検出にとどまる。一方調査区東部では、奈良時代以前のT字状に交わる溝、奈良時代から平安時代にかけての小規模な溝状遺構及びピットを22基、中世の杭列1条を検出した。その他の近世末以降の耕作に伴う溝及び自然開析溝については、遺構平面図に載せるもここでは詳述しない。ピット群についてはいずれも建物としての構成要素はみられない。

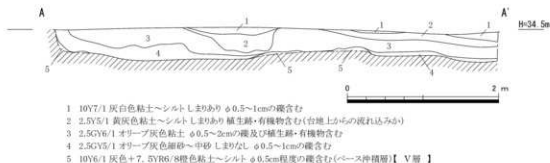


第10図 奈良時代以前の遺構面 全体図(1:200)

(2) 主な遺構

【奈良時代以前】

溝 SD41・42 (第10・11図) 調査区東辺で古代遺構面下であるV層上より検出した。溝41はN40°Wで調査区を縦断し、溝幅は崩落部を除き約1.8m、深さは南端部で約0.6m、北端部では約0.4m、検出長約17mを測る。溝42はN57°Eで溝41より東に向かい派生し、溝幅は崩落部を除き約1.8m、深さ約0.35m、検出長約7.7mを測る。溝41を調査区外に延長すると南は不遑の池の余水吐部に向かい、北は17次調査3トレンチ東端に検出された沼状遺構(NR38)西肩部へと向かう。溝内には遺物が全く検出されず、砂・シルトからなるV層上の素掘り溝である溝41の西肩形状を見る限り、扇状地山側からの伏流水による影響及び不遑の池からの余水等の影響で比較的短期間で崩落・埋没し、溝内堆積土に葦系水生植物の植生跡が多くみられることから、しばらくの間は溝内が沼状化していたと考えられる。溝41の検出後、溝内の北端部及び溝南端部の西肩部に木杭断本を検出したが、杭先は溝底には達しておらず、上層から打込まれたものとみる。後の木杭分析によると、平安時代後期から鎌倉時代にかけての造作とみられ、IV層上に検出された杭列の一部と考えられる。



第11図 溝41・42断面図(1:50)

【奈良時代から平安時代中期】

溝 SD04 (第12図) 地区割B5に位置し、IV層上で検出した。溝04の方はN21°Wで溝幅約0.25m、深さ約0.12m、検出長2.9mを測り、埋土は褐色粘質中砂である。溝内からは平安時代中期の灰軸陶器の椀片が出土している。

溝 SD05 (第12図) 地区割B5に位置し、IV層上で検出した。溝05の方はN45°Wで溝幅約0.5m、深さ平均約0.1m、検出長3.2mを測る。形状は不定形で溝底面はφ10cm程度の凹みが多くみられる。埋土は灰色細・中砂である。溝内からは奈良時代から平安時代前期にかけての須恵器壺片が底面の凹みに突き刺さるように出土している。

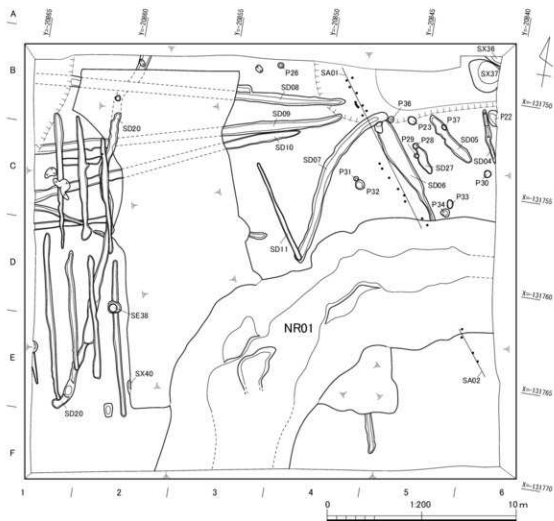
溝 SD06 (第12図) 地区割B4・B5・C5に位置し、IV層上で検出した。溝06は溝41の上に位置しN40°Wと同方向に展開する。溝幅は最大で約1.0m、深さ平均約0.15m、検出長5.8mを測る。形状は不定形で溝底面はφ10cm程度の凹みが多くみられる。埋土は灰色細・中砂である。溝内からは奈良時代から平安時代前期にかけての須恵器杯A・壺片、土師器杯・皿片が出土している。

ビット P28 (第 12 図) 地区割 B4・B5 に位置し、Ⅳ層上で検出した。ビット 28 は直径約 0.3 m、深さ約 0.55 m を測り、埋土は灰色粘質細・中砂である。ビット内から奈良時代から平安時代前期にかけての須恵器杯片が出土している。

ビット P32 (第 12 図) 地区割 C 4 に位置し、Ⅳ層上で検出した。ビット 32 は直径約 0.5 m、深さ約 0.42 m を測り、埋土は黒褐色粘質細・中砂である。ビット内からは奈良時代から平安時代前期にかけての黒色土器 A 碗・須恵器甕片が出土している。

井戸 SE38 (第 12・13 図) 地区割 D2 に位置し、Ⅴ層上の近世末以降の耕作溝下で検出した。井戸 38 の検出は底部のみであり、無底の曲物一段に約 5～8 cm の石が敷き詰められる。曲物の直径は 42 cm、深さ 8 cm を測り、掘方直径は約 70 cm を測る。曲物内の集石部より奈良時代から平安時代前期にかけての土師器杯・皿片が出土している。曲物については土壌化していた。

流路 NR01 (第 12 図) 調査区南中央部より東中央部に振れる幅約 7 m、深さ約 1.3 m の自然流路である。Ⅳ層上に形成されており、奈良時代以前の溝 41 を切る。断面観察から少なくとも 2 期



第 12 図 奈良時代～江戸時代の遺構面 全体図 (1 : 200)

に分けられ、明確に出土遺物の層位を区分するのは困難であるが、2期目である上層からの遺物の出土は非常に少なくみえる。1期目については地区割D5付近の灰白色の砂礫層（東壁第32層）及び、調査区南端中央のE3地区付近の流路底から遺物の出土が多くみられる。遺物の内容については、弥生時代中期から古墳時代にかけての土器片が出土している。また、1点ではあるが縄文時代晩期の土器片も出土している。

落込み SX36・37（第12図） 地区割A5の調査区北東角に位置する。東壁断面では段状に、北壁断面ではスロープ状に下がり、IV層上面では最も低い位置にあたる。埋土は落込み36・37ともに黒色粘質中砂と同一であり、一体した低部への流れ込み堆積と考える。遺物は古墳時代の甍片、飛鳥時代から奈良時代の土器片を包含する。

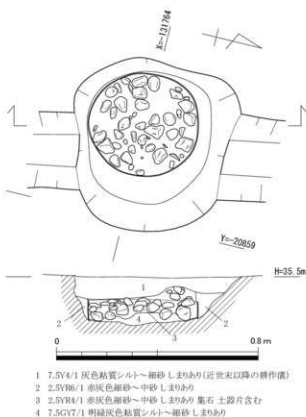
落込み SX40（第12図） 地区割E2に位置し、V層上に研究棟基礎の攪乱に切られる形で検出した。南から北に向かい約0.8m緩やかに下がり堆積する。埋土は灰オリーブ色シルトで落込み内からは縄文時代晩期の貼付刻目突帯をもつ深鉢片が出土している。二次的な流れ込みによる堆積であろう。

【平安時代後期から鎌倉時代】

柵（杭列） SA01・02（第12図） 調査区東辺、奈良時代以前の溝41上に位置し、IV層上面で検出した。検出長は16mを測り、方位はN35°Wで溝41よりやや東に振れ、流路01内においても数本の杭を確認している。木杭に関しては杭列北端（地区割B4）検出の杭と、杭列南端（地区割D6）検出の杭が同一個体の木材とみられ、杭先加工についても同一性をもつことから、株式会社パレオ・ラボに放射性炭素年代測定を依頼した。測定結果は木材伐採年代が12世紀中頃から13世紀中頃の暦年代であった（付章）。

【江戸時代以降】

溝 SD08・09・10（第12図） 調査区北西から北東に位置し、溝内の砂礫層の堆積状況から排水溝といえる。溝幅約0.5～0.6m、深さ約0.1～0.3m、検出長14～16.5mを測り、地形が低くなる調査区北東角に向かい下る。近世末以降の耕作溝に切られ、遺物の出土はないが、Ⅲ・Ⅳ層削平後のV層上で検出されたことから江戸時代以降とみる。



第13図 井戸38平面・断面図（1：15）

- 1 7.5V4/I 灰色粘質シルト～細砂しまりあり（近世末以降の耕作溝）
- 2 2.5V8B/I 赤灰色細砂～中砂しまりあり
- 3 2.5V8A/I 赤灰色細砂～中砂しまりあり 礫石・土器片含む
- 4 7.5GV7/I 明緑灰色粘質シルト～細砂しまりあり

7. 遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナ1箱で、年代は縄文時代晩期から鎌倉時代までである。遺構に伴うものとしては奈良時代から平安時代にかけて、自然流路に伴うものとしては主に弥生時代中期から古墳時代にかけての遺物が出土した。自然流路内の遺物には大型製品片が目立つ。いずれも細片が多く摩滅が著しかったため、図示が困難な遺物は写真のみとした。

流路 NR01 (第14図: 1~10) 1は縄文土器である。摩滅が著しいが外面に縄目が残る。2~7は弥生土器である。2は甕で口縁は屈曲し、口唇部に沈線を巡らし刻み目を連続で施す。3・4は甕の底部である。5は高坏である。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は平坦である。外面に凹線文を3条施す。6は壺の頸部である。外面に横位と縦位に櫛描文を施す。7は壺の胴部である。外面に波状と横位に櫛描文を施す。2はⅢ様式、7はⅣ様式と考えられ、2~7は弥生時代中期である。8~10は古式土師器である。8は甕である。口縁部は短く屈曲する。9は甕の底部で、やや上げ底である。10は壺の体部である。8~10は古墳時代前期か。

落込み SX37 (第14図: 11・12) 11・12は古式土師器である。11は甕である。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁端部が内面に肥厚する。布留甕。12は口縁部で直線的に外傾する。小型丸底壺か。古墳時代前期。

落込み SX40 (第14図: 13) 13は縄文土器の深鉢である。貼付突帯に刻み目を施す。縄文時代晩期。

溝 SD04 (第14図: 14) 14は灰釉陶器の碗である。断面台形の高台である。平安時代中期。

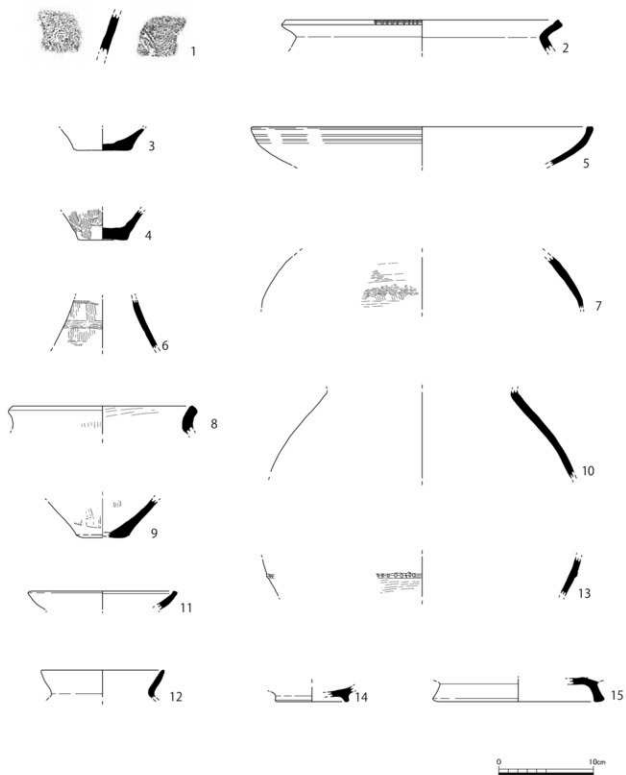
南壁面包含層 (第14図: 15) 15は須恵器の円面硯か。底面端部はやや肥厚し平坦である。平安時代か。

溝 SD05 (図版第9: 16) 16は須恵器の甕である。外面は平行叩目を施し、内面に同心円文の当て具痕が残る。奈良時代から平安時代前期。

溝 SD06 (図版第9: 17) 17は須恵器の杯Aの底部である。奈良時代末から平安時代前期。

ビット P32 (図版第9: 18) 18は黒色土器A類の碗である。内面にヘラ磨きを施す。平安時代前期。

井戸 SE38 (図版第9: 19) 19は土師器の杯である。奈良時代末から平安時代前期。



第14图 出土遺物 (1:4)

8. まとめ

今回の調査では、旧研究棟基礎による攪乱、後世の削平、自然流路の占有により、遺構の残存状況は良くなかった。しかしながら、古山陰・山陽道併用区間と想定される府道22号線に沿う奈良時代以前の溝41が検出されたことは、大きな成果と考える。溝41には遺物の包含はないものの、古代遺構面下より検出され、その南延長は不違の池の余水吐へ、北延長は17次調査3トレンチ東端まで続くと思われる。総延長は少なくとも約120mとなり、奈良時代以前の古山陰道の側溝機能を併せ持たせるために設けられた可能性も否定できない。そして、この溝41を境に当調査地の南に隣接する台地状に高い地形が本調査地西側まで広がり続いていたことは、調査区北・東壁断面及び井戸38の検出状況からみても明らかであろう。この台地上部より流れ込む土砂の堆積により、沼状化していた溝41は完全に埋没したと考えられる。その後の鎌倉時代に至る杭列に関しても、台地裾部に設けられ、地割若しくは土止め部材的役割を果たしていたと推察する。また遺構に伴うものではないが、6次調査に引き続き縄文時代晩期の貼付刻目赤帯をもつ深鉢片が出土したことにより、当時の興戸地域での人跡がより明確化したであろう。一方で、本調査地付近に推定されている興戸廃寺に関わる痕跡はみられなかった。

以下では、本調査の成果をもとに、不違の池や溝41の形成及び、異方位の方格地割²⁾等について考察する。

(1) 不違の池と古山陰道

不違の池は、興戸大谷・石峠より流れる防賀川の伏流水による湧水が多い扇状地扇端部に程近い位置にあたり、本調査地での扇状地形ベース沖積層のV層を掘り込んで形成されているとみえる。V層は主にシルト・砂で構成されており、VI層以下は薄層に平坦に堆積し、固く締まる黒褐色粘土層（北壁第62層）上までが伏流水の影響を強く受けているとみられる。不違の池及び本調査地は、ちょうどV層とVI層が近接し始める位置にあたり、伏流水による湧水が強く影響するとみられる。

現在の不違の池の形状は府道22号線沿いに南北約90m、東西約17mと溝状に広がる。池の水位を一定に保つための余水吐が池の北端に設けられ、北へ向かって自然排水されている。国土地理院の1948年及び1961年の航空写真でみる不違の池は少し南へ広がるも、現在と同様に府道22号線に面して溝状にきれいに区画されている。余水吐も現在と同じく池北端にあったとみられ、府道22号線沿いに15m程北に流れ下り、さんさん山城の出入り口付近から府道22号線下の暗渠を通り、東に流れ下るとみられる。現在は歩道下に暗渠化され確認は難しいが、おそらく同排水ルートであろう。

一方、溝41の延長は上記府道沿い現ルートから4～5m西側に逸れる。さんさん山城が所在する一段台地状に高くなる（2次調査地）裾際部を通り、不違の池北端の余水吐まで一直線につながる。溝41・42は不違の池の余水路及び灌溉水路と推察する。

神功皇后にまつわる伝承のある不違の池であるが、その立地・形状は灌溉築堤溜池である可能性

が考えられる。水源は扇状地扇端部の湧水による湧水水源型溜池⁴⁾であろう。その築堤部が府道22号線下の古山陰・山陽併用道路として想定される道路敷にあたる可能性がある。

この灌漑溜池の堤を兼ねる道路の例としては、足利健亮氏が古北陸道¹⁾として推定されている直線計画古道宇治橋東詰から六地藏に至る間に所在した四ツ池（現在の宇治市五ヶ庄新開）が挙げられる。現在四ツ池は宅地化により埋め立てられたが、国土地理院航空写真（1946～1956年）で確認できる。足利氏は灌漑溜池である四ツ池と堤下に西に広がる条里地割耕地は一体であり、水資源の安定確保をもって成立するとし、四ツ池堤は条里地割とほぼ同時かやや先行して築かれ、当初から堤と兼ねる道路として計画・設置された¹⁾と推定されている。

興戸地域の古山陰道は、上述の例と同様に堤を兼ね備えた直線計画古道であり、不違の池の形成にも関わる可能性が考えられる。



第15図 溝41延長図(1:2,000)
国土地理院基礎地図情報(shp)より

(2) 異方位地割とミヤケ（屯倉・官家）

これまでに異方位地割とミヤケの関係については歴史地理学研究において論考されているが、ここでは、それをもとに興戸遺跡の異方位地割とミヤケの存在を考察する。

ミヤケとは、田地・田部（耕作民）・建物（倉庫）から構成される王権直轄領であり、灌漑開発・農耕経営等の経済的性質とともに軍事的・祭祀的性質もおびたものとされている。時期区分としては前期ミヤケ（開墾地系地方豪族管理型）と後期ミヤケ（貢進地系中央官人管理型）とに区分され、大化の改新により廃止される。大化後のミヤケの多くはその所在地に設けられた官衙（国府・郡家）に引き継がれるとされ、郡家は「コオリノミヤケ」とも読まれている。

歴史地理学の観点からは、「ミヤケ」・「イヌカイ」・「タバ」の地名が関連し、立地については中央への稲穀輸送及び軍事拠点として便利な交通路（陸・水運）沿いに設けられたとされている。千田稔氏による大和・近江の盆地及び平野における異方位地割とミヤケとの関係論証⁵⁾では、「広範囲に施行されたある一定の方向をもつ条里分布域の縁辺部において、それに接して異方向の方格状の地割をもつので、かつその付近にミヤケ関係地名あるいはミヤケの存在を証明し得る資料がある場合、その異方向の地割は統一的な地割よりも先行しかつそれがミヤケに関連するとみなす」とされている。

上記の歴史地理学研究及びミヤケの考古学的研究、そのほかミヤケに関連する資料をもとに興戸遺跡について考察すると、以下のとおりとなる。

- ①興戸遺跡の各年次調査において、 $N33^{\circ} W$ 及びそれに直交する $N57^{\circ} E$ を標準とした異方位方格地割が検出されている。今回の調査でもこれに近い $N40^{\circ} W$ の溝（溝41）及び $N57^{\circ} E$ の溝（溝42）が検出されている。発掘調査での確認はなされていないが、航空写真（1948年）では防賀川付近から東の木津川河道までの南山城平野では正南北方位の統一的な方格地割が認められ、興戸遺跡の異方位地割エリアは南山城平野の縁辺部といえる。
- ②地名については、興戸北鉾立の北に京田辺市田辺（旧綴喜郡田辺町小字田辺）が所在する。「タベ」は田部のほかに田辺と表す可能性があり、千田氏の『ミヤケの地理的実体：畿内とその周辺における立地と地割の問題』³⁾で既にミヤケの候補地（山背 T-3）として挙げられている。



第16図 国土地理院航空写真（1948年）の異方位地割範囲

- ③ミヤケの立地については、幹線道路としての古山陰道に接する地が候補に挙がる。1948年の航空写真でみる異方位方格地割の中心（第16図の矢印で囲まれた範囲の中心部）、丘陵側に位置する興戸小モ詰は、古山陰道より台地状に一段高くなり、冠水し難い好適地に挙がる。また2次調査では官衙的建物群が検出されている。
- ④屯倉の考古学的研究において、上原真人氏は、初期瓦生産（6世紀末から7世紀前半）においては消費地から遠く離れた場所に瓦窯が設けられ、これらの窯の近くに屯倉推定地が存在する⁶⁾と論証されている。上原氏の『初期瓦生産と屯倉制』では、興戸宮ノ前窯の近くに屯倉の存在を示唆されている。この興戸宮ノ前窯は酒屋神社の北東約50mに位置し、興戸小モ詰のミヤケ推定地からは南西約700mの位置に所在する。
- ⑤現在興戸小モ詰の南には興戸郡塚（コオリヅカ）の小字が所在し、式内社である酒屋神社の縁起絵巻には「綴喜原郡本（コオリモト）にしるしの塚」⁷⁾とある。これらは「郡家」の存在をうかがわせる。
- ⑥『日本書紀』推古天皇十五年冬「山背国に、大溝を粟隈に掘る。且河内国に、戸苜池・依網池作る。亦国毎に屯倉を置く。」⁸⁾とあるように、池溝開発とミヤケの設置は一体的に進められていたと考えられる。
- ⑦後述の推古期敷設と想定される古山陰道が、灌漑溜池である不違の池の堤を併せ持ち、池溝開発に伴うミヤケの存在をうかがわせる。

以上を勘案すると、興戸小モ詰に官衙（郡家）及びそれに先行するミヤケが存在した可能性が高まるとともに、興戸の異方位地割は正南北方位の統一地割より先行した地割であると考えられることができる。今回の調査においても異方位地割は確認できたが、台地状部分が完全に削平され、溝のほかは古代の井戸底を残すのみであったため、ミヤケ及び官衙の実態解明には至らなかった。

（3）不違の池と溝41の成立時期

本調査で検出された溝41は不違の池よりN40°Wに直線以北に向かっている。これは府道22号線よりやや西に振れるが、おそらくは本調査地が南の台地状に一段高くなる（2次調査地）地形が続きその台地状裾際に溝41が設けられていたためだろう。ただ、東側に道路もしくは堤等の存在を意識した造りともみえる。

溝41の年代を特定できる遺物は含まれなかったが、古代遺構面の下層で検出されていることや、14次調査での府道22号線（古山陰・山陽併用道路）に直交する飛鳥時代の道路の検出、灌漑堤を併せ持つ道路造営やミヤケの存在等を考えると、古山陰道（古山陽道併用以前）の敷設時期を推古朝¹⁾と推定する足利氏の見解に理解を得るとともに、不違の池はそれと同時に、溝41もそれとはほぼ変わらない時期に成立したことが推測される。

【注・引用文献】

- 1) 足利健亮 1985『日本古代地理研究』大明堂
- 2) 伊野近富 1991『興戸遺跡第6・8次発掘調査概要』『京都市遺跡調査概報 第42冊』@京都市埋蔵文化財調査研究センター
- 3) 山口博・大槻真純 1980『興戸遺跡発掘調査概要』『埋蔵文化財調査概報 1980年 第1分冊』京都市教育委員会
- 4) 北山峰生 2012『古代前池の貯水原理』『菟原Ⅱ－森岡秀人さん遺贈記念論文集－』菟原刊行会
- 5) 千田隆 1975『(論説) ミヤケの地理的実体：畿内とその周辺における立地と地割の問題』『史林』第58巻(4)史学研究会
- 6) 上原真人 2003『初期瓦生産と屯倉制』『京都大学文学部研究紀要』第42号 京都大学大学院文学研究科・文学部
- 7) 村田太平(編者代表) 1968『京都市田辺町史』田辺町役場
- 8) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 校注 1995『日本書紀(四)』岩波書店

【引用参考文献】

- 江谷寛・栗野謙 1975『北神立発掘調査概要』田辺町教育委員会
- 伊賀高弘 1988『興戸遺跡発掘調査概要』『京都市遺跡調査概報 第27冊』@京都市埋蔵文化財調査研究センター
- 廣野一太郎 1989『興戸遺跡発掘調査概報－都塚地区の調査－』田辺町教育委員会
- 廣野一太郎 1995『稲葉遺跡第2次・興戸遺跡第7次発掘調査概報』田辺町教育委員会
- 廣野一太郎 1992『興戸遺跡第9次発掘調査概報－都市計画街路新田辺駅前線予定地の調査－』田辺町教育委員会
- 伊野近富 1992『興戸遺跡第11次発掘調査概要』『京都市遺跡調査概報 第47冊』@京都市埋蔵文化財調査研究センター
- 廣野一太郎 1995『興戸遺跡第12次・興戸古墳群発掘調査概報－関西電力高島線鉄塔建替地の調査－』田辺町教育委員会
- 廣野一太郎・五百磐圓 1998『興戸遺跡第13次・14次発掘調査概報』京田辺市教育委員会
- 廣野一太郎・持田透 2011『興戸遺跡第16次発掘調査報告書』京田辺市教育委員会
- 戸原和人 2012『興戸遺跡第17次発掘調査報告』『京都市遺跡調査報告集 第151冊』公益財団法人京都市埋蔵文化財調査研究センター
- 廣野一太郎・濱口芳郎 2015『興戸遺跡第18次発掘調査報告書－興戸塚ノ本地内宅地造成に伴う発掘調査－』京田辺市教育委員会

【参考文献】

- 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年の研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7-19世紀－』京都編集工房
- 寺沢薫・森岡秀人 1990『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 森下衛 1998『京都市八幡市内里八丁遺跡の道路状遺構』『古代交通研究 第8号』古代交通研究会
- 川内春三 2015『復原研究にみる古代依網池の間瀬』『四天王寺大学紀要』第59号 四天王寺大学
- 高橋誠一 1981『第一節 条里とその遺構』『京津市史』第1巻 京津市役所
- 仁藤政史 2009『古代王権と「後期ミヤケ」』『国立歴史民俗博物館研究報告 第152集』共同研究『古代における生産と権力とイデオロギ－』国立歴史民俗博物館
- 久世康博 1995『平安京周辺の祭祀』『研究紀要』第1号 京都市埋蔵文化財調査研究所
- 久世康博 2000『研究ノート』井戸はどうして埋められたのか(土器を入れる)』『研究紀要』第7号 京都市埋蔵文化財研究所
- 木下良 2009『辞典 日本古代の道と駅』吉川弘文館
- 木下良・武部健一 2005『畿古代の道－山陰道・山陽道・南海道・西海道－』吉川弘文館
- 山本博 1986『中世の井戸の成立と構造』『日本考古学論集 2 集落と衣食住』吉川弘文館
- 矢野建一 2018『日本古代の宗教と社会』塙書房
- 吉田東伍 1992『増補 大日本地名辞書 第二巻』(新装版) 富山房
- 井上光貞・川副武風・佐伯有清 2020『日本書紀(上)』中央公論新社
- 井上光貞・笹山晴生 2020『日本書紀(下)』中央公論新社

付章. 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadize・辻 康男

1. はじめに

京都府京田辺市の興戸遺跡から出土した杭材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表2のとおりである。最終形成年輪を含む2年輪分を測定試料として採取した。試料の杭材（試料No.1）と測定試料（PLD-46476）の採取位置を第17・18図に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS；NEC製L5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表2 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-46476	試料 No.1 遺構：SD41 採取場所：調査区東側掘 位置：溝南端の西岸部 層位：V層上	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：12 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）



第17図 杭材（試料No.1）



第18図 測定試料（PLD-46476）の採取位置

3. 結果

表3に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表3 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-46476 試料 No.1	-28.57 \pm 0.25	855 \pm 21	855 \pm 20	1176-1194 cal AD (31.35%) 1200-1221 cal AD (36.92%)	1160-1230 cal AD (91.83%) 1243-1258 cal AD (3.62%)

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期 5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

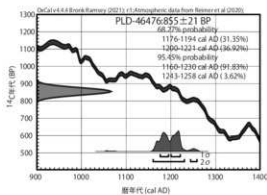
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

SD41のV層上で検出された杭材(試料No.1: PLD-46476)の測定結果(以下の較正年代は2 σ の値)は、 ^{14}C 年代が855 \pm 20 BP、較正年代が1160-1230 cal AD (91.83%) および1243-1258 cal AD (3.62%)で、12世紀中頃～13世紀中頃の暦年代であった。飛鳥時代以降の時期区分について児玉編(2018)に従うと、杭材(試料No.1)の暦年代は、平安時代後期～鎌倉時代に対比される。杭材(試料No.1)は、年輪数が5年程度の直径の細い芯持ち丸木で、最終形成年輪が残っていた。測定試料は、最終形成年輪を含む2年分を採取している。よって、杭材として加工された木材の枯死・伐採年代は、測定結果の12世紀中頃～13世紀中頃と判断できる。



第19図 暦年較正結果

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1) , 337-360.
- 見玉幸多編 (2018) 標準日本史年表. 66p. 吉川弘文館.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20. 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, L., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP) . *Radiocarbon*, 62 (4) , 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020).

圖 版

図版第 1



1. 溝 41・42 完掘状況（北から）

図版第 2



1. 溝 41・42、流路 01 完掘状況 (北から)



2. 溝 41・42、流路 01 完掘状況 (西から)

図版第3



1. 溝 41・42 完掘状況 (南西から)



2. 流路 01 完掘状況 (北西から)

図版第4



1. 奈良時代～江戸時代の遺構面検出状況（北から）



2. 奈良時代～江戸時代の遺構面完掘状況（北から）

図版第 5



1. 奈良時代～江戸時代の遺構面完掘状況（俯瞰：図版下が北）



2. 奈良時代～江戸時代の遺構面完掘状況北東角部（南から）

図版第 6



1. 溝 05・06・27 完掘状況 (北から)



2. 近世末以降の耕作溝群完掘状況 (東から)

図版第 7



1. 井戸 38 検出状況
(東から)



2. 井戸 38 集石半截状況
(西から)



3. 溝 05 須恵器出土状況
(北から)

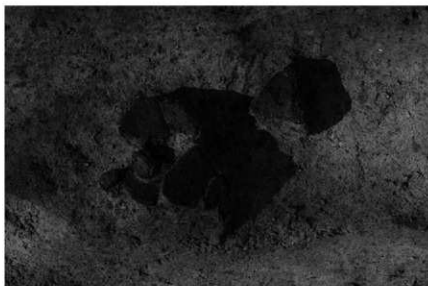
図版第 8



1. 落込み 40 縄文土器出土状況 (東から)

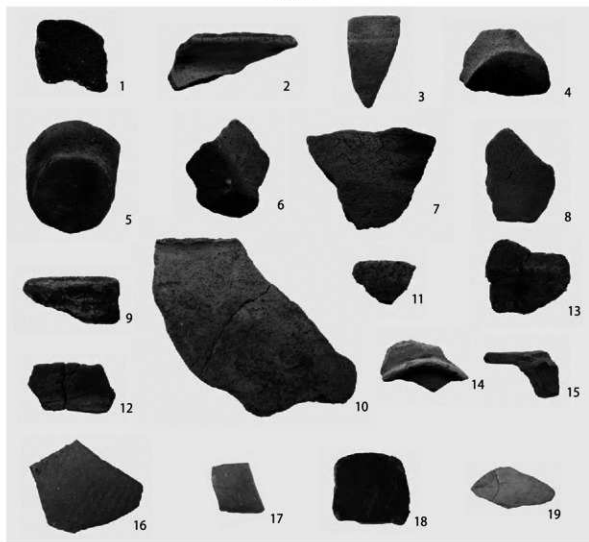


2. 落込み 40 攪乱断面 (東から)



3. 落込み 40 縄文土器出土状況 (東から)

図版第9



1. 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こうどいせきだい19じはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	興戸遺跡第19次発掘調査報告書							
副書名	田辺公園拡張整備事業に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	京田辺市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	吉兼千陽・石山淳・伊藤茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadize・辻康男							
編集機関	京田辺市市民部文化・スポーツ振興課 〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地							
	やましろ文化財株式会社 〒611-0002 京都府宇治市木幡南山12番地139							
発行年月日	2022年9月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
興戸遺跡	京都府京田辺市 興戸小モ話	26211	29	34° 81' 20"	135° 77' 20"	2021年 12月3日 ～ 2022年 2月21日	598㎡	田辺公園拡張整備事業
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
興戸遺跡	集落	飛鳥時代	溝		古代遺構面の下層より、府道22号線下に想定される古山陰・山陽併用道路に沿う溝を検出。			
		奈良時代～平安時代	井戸・土坑・溝・自然流路	土師器・須恵器・灰釉陶器・黒色土器	小規模な溝・土坑状遺構の検出。自然流路内より弥生中期(Ⅲ～Ⅳ)の土器片、古墳時代の土器片が出土。			
		平安時代後期～鎌倉時代	欄(杭列)		古山陰・山陽道に沿う杭列を検出。			
		近世以降	溝	磁器・土製品	中世以降に耕作地化するとみられる。			

令和4年(2022年)9月30日発行

興戸遺跡第19次発掘調査報告書

—田辺公園拡張整備事業に伴う発掘調査—
(京田辺市埋蔵文化財調査報告書 第45集)

発行 京田辺市
〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地

編集 京田辺市市民部文化・スポーツ振興課
やましろ文化財株式会社
〒611-0002 京都府宇治市木幡南山12番地139

印刷 奥田印刷株式会社
〒602-8041 京都府京都市上京区下長者町通新町西入藪ノ内町79

